



稲川の三梨地区は米どころで、皆瀬川を挟んで川東と川西地区に分かれている。川東地区は緩い河岸段丘になっていて、大永5年（1525年）に開鑿（かいさく）された五ヶ村堰は、皆瀬川から水を取って満々と流れ、多くの田んぼを潤している。

与惣右工門の生まれ育った川西地区は皆瀬川よりかなりの高台になっていて、西の山から流れ出るわずかな水しか利用できなかった。

第1章

「うらやましなー。川東の田んぼなばあんたに黄金色に輝いで、なんぼえっぴゃ米採れるんだが！」

川西のおらだほなば田んぼの水たりねくてほんど実っこちでね。

あーあー、水あればなー。あーあー。あの皆瀬川の水引げればなー」

大人たちは、いつもいつもこの言葉を繰り返し、ため息をついた。

そして、育ち盛りの子どもたちは「腹減ったー、腹減ったー」と親にしがみついて訴えていた。

与惣右工門の家のすぐ東側は崖になっていて、戸を開ければ、とうとうと水をたたえた皆瀬川の流れや、川東地区の田んぼの様子が見下ろされた。与惣右工門の住むこの川西地区の田んぼとは大違いだ。水が少ないからだ。すぐ下に皆瀬川の水があるが、その水を利用することができないのだ。



「なんじすれば、皆瀬川の水を持ってこれるべ。なっじすればえななべ」
与惣右工門は、物心つくころよりそればかり考えていた。そして、
「よし！俺がなんじがして皆瀬川の水を、ここまで引いてみせる」
「この川西地区でも、米がえっぺえ採れるようにしてみせる」
春から秋へと、親やこの地区の人々が、一心に働いても報われないのは、水がないからだ。皆瀬川の水さえ引ければ、苦労は報われるのだと強く思うようになった。

その頃、年貢米を多く取り立てるために、土地の広さを測る検地が各地で行われていた。与惣右工門は検地のことや測量の仕方、土木工事のことに関心を持ち、学び、おおよそのことを会得した。そして、川西地区の堰の具体的な実行に向け、動き始めた。

仕事の合間を見つけては、この川西地区の高台に水を引くには皆瀬川のどれくらい上流に取水口を作ればいいのか、下川原などの低い地域ではどれくらいの高さの山裾に堰を作れば良いかなど測量して杭を打ったり、図面に書いたりした。しかし、考えなければいけないことが山ほどあった。

思いあぐねて近くの稲荷神社に何度も足を運んでお願いした。



第2章

皆瀬川の取水口から飯田村までのおおよその構想が出来上がったが、とてもとても一人二人で出来るものではない。多くの村人の協力を得なければできないものではない。お金も必要だ。

「さてどうしよう、どうすれば人々は自分を信頼して協力してくれるだろうか？」

稲荷神社に益々しげく足を運び

「どうぞ、私に力を貸してください。この川西の人々に水をあたえてください」と、熱心に懇願した。

そのせいだろうか、ある冬の夜、夢に狐が現れて

「自分の足あとをたどるが良い」

という。疑心暗鬼な思いで外に出、自分の集落である京政の入口に行ってみたら、自分が堰を作ろうと印してあった所とほぼ同じところに点々と狐の足跡があり、上久保のほうに向かっていた。

「お稲荷様私の願いを聞いて下さった。自分の測量に自信を持っていいのだ」と、与惣右エ門は感動で胸がいっぱいになった。

「さあ、行動に移さねばでげね」と、強く決意した。



第3章

さっそく、京政、宮田、羽竜、飯田、上久保、下川原などの、各集落の主だった人に相談し、それぞれの集落の人々を集めてもらった。

「この川西地区にも五ヶ村堰のような堰が作れること。

お稲荷様の加護があること。

子どもも、お年寄りも、もちろん働き盛りの人も、とにかくみんなで力を合わせなければできない大事業であること。

完成すれば米が沢山実り、今より豊かになれること」
等を語った。

こんな集まりを何十回も開いたし、堰作りの専門家の力も必要だ。お金もかなり必要だ。もちろん与惣右工門は全財産を注ぎ込む覚悟だったが、寄付金も集まった。

人々の気運も高まり、慶安3年（1650年）に川西の念願の堰作りを佐竹藩に願い出、いよいよ堰作りが動き出した。



第4章

掘る人、もっこで土を運ぶ人、土手を杭などで頑丈にする人、いろいろな場面で指示する人、いにぎりや飲み物を用意する人、運ぶ人、交代する人。みんな希望に燃えて自分の出来る仕事を進んでやった。

取水口から、朝月山の麓を掘り進み、岩城の集落の山裾に沿って掘り進んだ。所々に杉などの林があり困難を極めた。岩城の集落や下川原の集落は低地なので、家並みのかなり上を掘り進むことになった。

さて、下川原と上久保の集落の間には、蛇の崎と言って、蛇が胴体を皆瀬川に長く伸ばし、頭をぐいと持ち上げたような崖があり、そのままストンと30メートルほど皆瀬川に落ち込んでいるところがある。ここは人々も行き来に難儀な急峻な所である。

この堰を作るにあたって、誰もが一番の難所と思っていたところだ。

案の定、皆瀬川の流れでも、何千年、何万年、削り取れなかった蛇の崎の先端は、鉄のように黒光りする大きな硬い岩盤だった。そこはなんとしてもトンネルにしなければ水は皆瀬川に滝のように落ちてしまう。



第5章

玄翁（げんのう）とたがねでどんなに力いっぱい叩いても岩盤に小さな傷がつくぐらいで、一日頑張ってもさっぱり掘り進めない。十日、一月と渾身の力で叩いても、少ししか進めない。いや進むのが見えないような日々だった。村人は、

「やっぱり無理だ」

「できっこね」

とあきらめて、一人、二人と去り始め、いつの間にか与惣右エ門一人になってしまった。

それでも与惣右エ門は玄翁とたがねで何日もコンコンコツコツ、ありったけの力で叩いたが岩が硬すぎた。とうとう、与惣右エ門ですら

「やっぱり、無理だななべが」

「俺の考えがまじがってだななべが！」

とくじけそうになった。

しかし、

「ここであきらめでいられね」

そんな自分を奮い立たせようと蛇の崎に磔柱を立てた。

「必ずこの岩にトンネルを掘って水を通す。必ず、必ずうがつ。」

もし、でげねどぎは、磔になって死んだってもえ！」

と決意して、毎日毎日こつこつ岩をうがった。

村の人たちは

「与惣右エ門は狂ったのでねべが」
と噂するようになり、子どもたちは馬鹿にしてはやし立てるようになったという。
「与惣右エ門のばがー。
岩ただいでなんになるー。
でげっこねえのに、朝から晩まで岩叩く、岩叩いてなんになるー」
「与惣右エ門は岩叩く。何年も何年も岩叩く。髪ふりみだして、岩を叩ぐ。
与惣右エ門は馬鹿になったど！」

与惣右エ門は何ヶ月頑張ったのだろう。日の出から日が沈むまで
「出来る、出来る。
少しずつ、少しずつ進んでる」
と信じながらこつこつ岩をうがっていた。
頭は白髪まじりになっていたが、息子が大きくなって一緒に頑張ってくれた。あばも大きな理解者で協力してくれた。

与惣右エ門の並々でない頑張りに、村人たちも
「やっぱり、おらも頑張らねば、見でらえね」
「あんたに頑張る和惣右エ門の言うごどは、本当だど思う。」
と、手伝う村人が日に日に増えていった。



第6章

こつこつこつ。

南側から岩盤を叩いて掘っている与惣右工門たちに、反対の北側からのこつんこつんと岩をうがっている息子たちの音が日に日に迫ってくるのが、はっきりと感じられるようになった。

そして、とうとう小さな穴が開けられた。待ちに待った瞬間だった。その小さな穴は、少しずつではあるが確実に広がり、ついには人の通れるほどのトンネルになった。

「わー、わー。でげだ。でげだー」

「あぎらめねでえがったー」

みんなで涙し、抱き合って喜び合った。



第7章

その後、上久保村、京政村、宮田村、飯田村へと堰は掘り進められ、とうとう元禄14年（1701年）に長さ7キロメートルの堰が完成した。51年の歳月がかかったのである。その後、何度も補強されたりして、今では、皆瀬川の水がのんのんと、7キロメートルにわたって流れ、面積二百余町歩の田んぼが広がる川西地区になり、有数の米どころとなったのである。

そして、その堰は300年以上の年月を経ても「与惣右エ門堰」と呼ばれ、感謝と尊敬の思いを込めて語り継がれているのである。

※ 佐藤公次郎先生がまとめた「稲川のむかしっこ」と稲川の年表を参考にまとめました。